

論理的思考力を高める社会科カリキュラムの構想と実践
～「非連続型テキスト」の読解力を高める指導と評価を通して～

井寄 芳春 丸野 亨

要約

社会科は、「市民として生きる力」の基礎をつくる場である。情報が氾濫する今日、適切な情報を選び、分析し、評価しながら効果的に活用する能力を身に付けることは重要な課題になっている。情報自体は容易に収集できるようになったが、本当にその情報が適切なのか、価値ある情報なのかということについての判断力を高めていくことが求められる。また情報を加工、編集して自分の考えを発信していくことも、これから強く求められている能力のひとつである。

情報教育の目標は、情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度、である。このような能力や態度を育むためにも、論理的思考力を育成することはすべての教科、総合的学習等で取り組むべきテーマである。直感的理解だけでは、現象面だけで物事をとらえてしまいかねず、このことが間違った判断や偏見を導き出すきっかけになりかねない。テキスト（連続・非連続）を注意深く、多様な視点から論理的に読み解き、明確な判断規準に基づいて情報そのものの価値や優劣を評価するような実践力や態度を培っていく必要がある。

大阪教育大学附属平野小学校・中学校の社会科では「課題意識を持ち、主体的に考える力を高める指導と評価のあり方」を研究主題に掲げ、カリキュラム開発を推進しているところである。実践研究の柱として掲げたキーワードが「資料リテラシー」である。資料リテラシーとは適切な資料に基づいて課題を探究し、資料を活用して論理的に表現する力である。

また、小中社会科では、カリキュラム開発の実践的枠組みとして「事実認識」「概念形成」「課題探究」の三つの過程において資料リテラシーを高める方略を構想している。とくに重視したことは資料リテラシーを高めるためのメソッドとして、「資料の論理的読解力を高める」ことと「資料ベースの論理的表現力を高める」ことである。前者は「問いを構成する指導の充実を図る」こと、後者は「書く指導の充実を図ること」である。このようなメソッドを系統的、段階的、累積的に高めていくことにより、社会科の本質に根ざした論理的思考力が育成されるものと考えられる。

本研究テーマでは副題として「『非連続型テキスト』の読解力を高める指導と評価を通して」としてしている。本論では、地図、統計、写真を読み解く能力（リテラシー）を発達段階に応じて仮説的に提示した。このような評価規準をカリキュラム構想や授業構成に生かしていくことにより、さらに資料に基づいて論理的に考えたり、表現したりする能力や態度が高まっていくと推察する。

今回、「中学校1年生、地理的分野「地域の規模に応じた調査（都道府県規模の調査）」で「大都市『大阪』の今と未来を考える」をテーマに単元開発を行った。この単元においても資料リテラシー向上のための取り組みや授業改善を行った。

代表者勤務校：大阪教育大学附属平野中学校

1. はじめに

平成20年1月17日に中央教育審議会の答申が示された。答申では「学習指導要領改訂の基本的な考え方」の一つとして、「『生きる力』という理念の共有」があげられている。「生きる力」をはぐくむことは前回と今回の学習指導要領を貫く柱であり、学校教育全体に渡る課題である。

社会科は、「市民として生きる力」の基礎をつくる場である。「市民として生きる」ことは、社会的問題に対し、当事者として適切に判断し続けていくことである。とくに情報が氾濫する今日、適切な情報を選び、分析し、評価しながら効果的に活用する能力を身に付けることは重要な課題になっている。市民的資質（シチズンシップ）の基礎を養う社会科を構想する際、情報に対する読解能力を計画的、系統的に高めていく方略を研究することは、知識基盤社会において必須かつ喫緊の課題となっている。

従来、大阪教育大学附属平野小学校・中学校の社会科では「課題意識を持ち、主体的に考える力を高める指導と評価のあり方」を研究主題に掲げ、連携教育を推進しているところである。実践研究の柱として掲げたキーワードが「資料リテラシー」である。資料リテラシーとは適切な資料に基づいて課題を探究し、資料を活用して論理的に表現する力である。資料読解を基盤とした論理的・総合的な問題解決力ともいえる。このような資料リテラシーを継続的、累積的に向上させることが「市民として生きる力」の基礎となる。指導と評価を系統化し、一貫化する作業を起点として連携を進めていきたいと考える。

とりわけ資料としての「非連続型テキスト」の読解に焦点化し、社会科教育としての情報教育を進めていくことにした。生徒は膨大で多様な「非連続型テキスト」に囲まれている。活字離れは同時に「非連続型テキスト」への傾倒が招き寄せていると推察する。非連続型テキストが日常生活に浸透していくことによって、子どもは直感的に理解できる情報から即断し、時間をかけて情報に含まれる論理を丹念に読み解くことを軽視しがちになる。表層的な直感的理解のもとでは、現象面だけで物事を考える浅薄な思考力しか育たない。重要なことは、連続型テキストと非連続型テキストを効果的に組み合わせ、相乗効果をもたらすような指導法を開発することではないだろうか。

本校社会科では、多様な非連続型テキストを利用した授業を行い、カリキュラムを編成してきた。例えば絵画資料、地図資料、統計資料、映像資料、写真資料等である。このような非連続型テキストの活用を通して、生徒の興味・関心を高め、考える力を育成してきた。ただし、これらの情報を論理的、批判的（クリティカル）に読解し、活用するための系統的な指導方法の開発は未整備である。小学校と中学校が連携、一貫し、「非連続型テキスト」をもとに論理的・批判的に考える態度や能力を高めることは、「連続型テキスト」への読解力を高めることにもつながると推察する。また、社会科カリキュラムが他教科、総合的学習等と豊かに連携することによって、情報教育全体が活性化されるものと考えている。

2. 研究の目的

(1)社会科で育てたい子ども像

本校では以下の三点を育てたい子ども像として掲げている。すべての項目に「考える」ことが含まれている。この「考える」ことの基本は論理的思考力であり、情報（資料）に基づいて論理的に考える能力や態度を培うことが社会科授業の根幹である。

よく見て考え、確かめようとする子ども

社会事象に関心を持ち、社会諸科学の知識や概念に基づいて多面的・多角的に観察することができる。社会事象を適切な資料をもとに政治、経済等の視点から分析、解釈し、判断する力を身に付けている。

自ら問いを持ち、調べ、考えを深める子ども

自ら課題を設定し、問いを深めながら、正確な知識、適切な資料をもとに追求し続けることができる。

民主・平和・国際等の観点から課題と自己と関わらせながら当事者として考える力を身に付けている。

他者と協同しながら考えをまとめ、表現しようとする子ども

他者と協同ながら多様な価値観や視点に学び、相手の考え、根拠となる資料に基づき、論理的に表現することができる。他者の意見を聞きながら、自分のことばで提案する力を身に付けている。

(2)研究仮説

社会科カリキュラムを構想する際、その基本的単位は単元である。単元で身に付けるべき学力を明らかにし、系統的な指導を進めていくことが求められよう。さらに単元間を相互に結びつけ、系統的、累積的に子どもの社会認識をはぐくみ、課題意識や論理的思考力を高めていきたい。小中社会科では以下の研究仮説を定め、研究を進めることにした。

以下の点をふまえた単元構成をすることにより、子どもの課題意識をはぐくみ、論理的思考力を向上させることができるであろう。

ア．各授業で身につけるべき知識と単元全体で身につけるべき概念を明らかにし構造化する。

イ．資料読解を基盤とした資料リテラシーを高める学習指導を組み込む。

ウ．習得から探究につながる「活用の授業」を位置づける。

「課題意識」とは課題に対して疑問をもち、自己の考えや生き方と照らし合わせ、世の中にかかわろうとする心的エネルギーである。課題意識が高い子どもは主体的に疑問を追究し、さらに課題意識を深めていく。また「論理的思考力」とは、「根拠や道筋が明確な思考のこと(学校教育辞典,教育出版,1988)」である。客観的な事実に基づき、筋道立てて考え、表現する力である。課題意識と論理的思考力は相即的に関連づけられおり、課題意識の深まりと論理的思考力の高まりは一体のものとしてとらえたい。

知識・概念の明確化と構造化

概念は具体的な社会事象を有効な視点から説明するための言語装置である。単元全体で習得すべき概念を明らかにした上で、各授業で習得すべき知識を構造化する。授業において習得した知識を次の授業で活用し、「より活用力のある知識」(=概念)を形成させる。

資料読解を通じた資料リテラシーの向上

記述、説明、主張等、書く力を高めることを柱に、国語科等と連携して言語力を高めていきたい。「資料を活用して知識を構成する授業」と「知識を活用して資料から新たな意味を構成する授業」の双方を重視した学習指導のあり方を工夫していきたい。

習得から探究につながる「活用の授業」を位置づける

単元において、知識・技能を習得させることを基礎とし、さらにそれらを活用して自ら課題を設定し、解決する場を設定する。習得した知識や概念、学習技能を活用して資料から豊かに情報を取り出す場を数多く設けたい。

3. 研究の内容と方法

(1)カリキュラム開発の手順

社会科では単元開発を軸にしたカリキュラム開発と授業研究を行っている。単元構成の工夫を主体としつつ、7年間の社会科カリキュラムを開発していく。単元は、大きく、習得型授業中心の単元と活用・探究型授業中心の単元の二つに分類することができる。習得型単元では、知識や概念、基礎的な技能の習得を主眼とし、活用・探究型単元では、習得型単元で身につけた知識や技能をさらに活用し、より理

解を深めるとともに、主体的な学習能力や問題解決能力を高めることを目的にする。

単元全体では、活用・探究型単元は2～3割程度である。習得・活用・探究の有機的な関連づけをはかり、習得型授業で培った知識や能力、態度を活用・探究型授業に生かしていく、あるいは活用・探究型授業で得た問題意識や学習能力を習得型授業でも生かしていく。

このように二つのタイプの異なる単元のバランスをはかりつつ年間計画に位置づけていくという方法で、カリキュラム開発を進めていく。

論理的思考を高める上で、特に大切なのは「資料に基づき、疑問点を調べるための課題探究の場」、「様々な価値基準に照らして自分なりに判断する意思決定の場」を設けることである。活用・探究重視型単元ではこれらの場を十分に保障しており、この単元の質をより高めていくという方向でカリキュラムの質を高めていくことができると考える。

(2)三段階の学習過程に基づく単元構成

単元を構成する学習過程を「事実認識過程」「概念形成過程」「課題探究過程」の三つに分類して構成する。学習の流れとしては、事実認識過程、概念形成過程ともに、把握、解釈を経て、説明に向かう。課題探究過程では、課題・仮説の設定、資料の収集・読解、提案の構成、論述というプロセスをたどる。事実認識・概念形成過程では教師の指導を軸に、知識や概念、基礎的な学習技能の形成を目指す。課題探究過程では、生徒が自ら課題を設定し、概念形成過程で習得した概念や技能を活用し、資料読解をベースにした探究に取り組む。さらに、社会的論争問題に対しての意思決定（判断）を構想し、構成し、社会に向かって提案性のある主張文を書くことも視野に入れる。

事実認識過程 知る段階

社会科は社会認識を通じて公民的資質(市民性)を育成する教科であるが、社会を認識するためには、事実認識が土台になければならない。社会科学の知見によって精査された視点や枠組みに基づいて、「事実(社会的事象)」を選択し、分析や総合を重ねていくことによって確かな社会認識が育まれる。所与の事実(社会的事象)をもとに、ものの見方・考え方を学び、複雑な社会事象から課題を発見したり、解決したりする能力や態度を育成していくことが社会科の重要な役割である。

「それ(事実)は何か?」「どのようになっているか?」ということに対して観察力を働かせ、事実をとらえる眼を鍛えることが事実認識過程の課題である。今日、子どもの身のまわりには、膨大で多様な情報に溢れている。中には偽りの情報、事実の一部を誇大に表現した情報、子どもの消費欲を刺激する情報等、子どもに誤った判断を促すような情報も多い。情報に対し、論理的思考を働かせ、事実はどうなっているのかということについて「こだわり」をもって観察する力を培いたい。

概念形成過程 - 分かる段階 -

概念は単に言語によってのみ伝えられるべきものではなく、疑問や知的好奇心を高める資料を知識体系と関連づけて提示し、因果関係、包含関係等、多様な関係に対する問いや気づきを促していくアプローチが必要である。事実認識過程が「何か?」という問いが中心であるのに対し、概念形成過程では「なぜか?」という問いが中心になる。

多様な資料の読解を通して、「つまり～」という抽象度の高い確かな説明(帰納的思考)と「例えば～」という具体性の強い、豊かで確かな説明(演繹的思考)さらに「なぜなら～」という、根拠(資料)を示した論理的な説明を加味していくことによって確かな概念形成に向かうことができる。個別の知識と概念的知識を統合し、概念相互の連関を広げることを通して豊かな知の習得に結びつけていくことが、課題探究過程にも生きてくる。

この過程では、資料を通して事実を認識した上で、概念を形成することを重視する。一次・二次資料、連続・非連続型テキスト等、多様な資料を授業で活用し、資料に応じた読解方法を習熟させる。資料を詳細に観察し、正確に読み解く力を養うとともに、識の相互関係や因果関係を考え、構造化していく。

課題探究過程 - 広げ、深める段階 -

社会的事象に関する知識や社会科学的な視点・方法に基づいて、社会科としての探究が成立する。また、認識をさらに深め、知のネットワーク化を図る意味でも主体的な探究の質を高めるアプローチは不可欠である。課題探究過程では「どうしたらいいか?」という問いが中心になってくる。認識をより高次の段階へ進めるためには発展的な学習の場において、探究力を向上させる指導方略のあり方が問われる。探究は課題を多面的・多角的、ミクロ、マクロの視点から推理し、問い続け、様々な資料をもとに論理的に検証・吟味していくことである。課題を設定し、仮説を立てる能力・態度、自己の探究を高い次元から評価し、多様な資料をもとに、軌道修正する能力・態度が求められる。

この過程では、自ら資料を収集し、それらを活用して課題を探究し、解決するような学習過程を構成する。獲得した知識や概念を活用し、教師が設定したテーマに基づき、自ら課題を設定し探究する過程において、有効な資料活用を促す。さらに社会的論争問題に対する認識と課題の探究によって得られた知見や行動の指針を創造的、論理的に表現させたい。社会形成者としての自覚と公的な問題を解決していこうとする意欲を高めるためにも意思決定を含んだ授業過程を構成することが肝要である。

この過程では、客観的な資料に基づいて自ら意見を構成することを重視する。社会的な論争問題について自分の主張文と他者の主張文を比較し、考えの相違を比較したり、合意を形成したりしながらさらに考えの質を高めさせていく。

これらの三つの過程は相互に関連付けられており、また関連づけることによりそれぞれの過程が充実し、活性化する。さらに「事実認識 概念形成 課題探究」というような流れだけでなく、「事実認識 課題探究 概念形成」という流れも成立する。大切なことは、事実認識をベースに各過程がきちんと授業・学習として成立していることであり、そのためのメソッドと評価規準が明確であることである。概念形成、課題探究の時間配分は単元によって異なる。単元によっては概念形成が中心のものや課題探究に多くの時間を費やすものもある。

(3)カリキュラム開発の支柱としての考える力とPISA型読解力

論理的思考は、社会科だけでなく、すべての教科・領域に必要な能力である。論理的思考力を高めていくという方向性を共有しながら、各教科、領域における考える力の内容や指導方法を明らかにし、相互の連携を密にしていく必要がある。ただし、論理的思考といっても、何について、どこまで、どのように指導し、どう評価すればいいのかが曖昧である。そこで、読解力(リーディング・リテラシー)に着目して研究を進めていくことにした。

文部科学省の「読解力向上プログラム」では、PISA型読解力を向上させるためには、「教科国語の指導のみならず、各教科及び総合的な学習の時間等の学校の教育活動全体を通じ、『考える力』を中核として『読む力』『書く力』を総合的に高めていくことが重要である」としている。社会科では、社会科カリキュラムを通して読解力を高めていくという、縦断的方向と教科・領域カリキュラムと関連させて読解力を高めていくという横断的方向で論理的思考力を育成するための方略を構想していきたい。

4. 資料リテラシーの向上

(1) 資料をベースにした社会科授業の構成

社会科は資料が基本であり、中心である。社会科の授業は常に資料の読解や活用とともに展開する。資料を読解することは、教科内容の理解を深めるだけでなく、問題解決に取り組み、提案するための能力や態度を形成することでもある。資料を媒介として、具体と抽象を往還させ、豊かな知識と確かな論理的思考力を培っていくことが社会科授業の中核となる。資料は社会科における内容知と方法知をつなぐメディアであり、効果的に活用することを通して両者を活性化する機能を持つ。

しかし、いくら教師が有効な資料を子どもに提示しても、その資料を十分に読解したり、論理的、批判的に検討したりする能力が育てられていなければ、結局、暗記中心の授業になってしまう。個々の具体的な資料に対する読解能力を系統的、段階的に高める指導の工夫が必要である。事実を客観的かつ正確に把握するためには、資料を詳細に読解することは不可欠であり、適切な資料を収集し、比較しなければならない。一方、テキストの中に埋没するのではなく、テキスト間の文脈や全体の意味等、多面的、多角的、総合的な視座からの判断や理解も重要な要素である。

資料は判断や意思決定の精度を左右する重要な素材である。ところが、一般に社会科の授業では、資料は十分に活用されているとはいえない。教科書や資料集、教師が収集した資料等が使われることがあっても、本文の中に知識内容や学習事項が既にかかれてあり、資料をもとに推理したり、資料に基づいて意見を発表したりする機会は少ない。社会科において、資料活用が進まない、深まらない理由の一つとして、資料の特性に応じた資料リテラシーが十分に育成されていないことにある。

社会科の授業では、発問や説明を効果的に配し、資料の特性に応じた読解指導を展開していくと同時に、資料相互の豊かな組み合わせを通して、資料読解の系統的、累積的な向上を図る必要がある。特に、非連続型テキストを含めた、実生活・実社会にある素材を資料として活用し、教科書・副読本と併用し、社会的課題について認識を深めさせていきたい。

(2) 総合的な問題解決能力としての資料リテラシー

資料リテラシーとは市民として必要とされる、資料読解を基盤とした総合的な問題解決能力であり、社会科固有の情報活用能力である。

資料リテラシー

事実認識・概念形成・課題探究の各学習プロセスにおいて、資料を把握、解釈、分析して社会的事象の特徴や意義を理解する能力

資料を活用し、資料に基づいて探究したことを論理的に表現（記述・説明・主張）する能力。

「資料活用の技能・表現」が社会科授業の枠組みの中で語られるのに対し、資料リテラシーは実社会、実生活における問題解決につながる広領域の概念である。資料リテラシーを育成するためには、「資料の特性に応じた読解方法」「発達段階に応じた資料リテラシー」を具体化する必要がある。

資料読解のプロセスは、資料の収集・観察 - 気づいたこと・分かったことを読み取る、資料の分析・比較 - 疑問点を出す、予想し、仮説を立てる、他の資料を使って調べる。資料の編集・表現 - 資料を批判的に吟味する、わかったこと・考えたことを表現する、の3段階である。

ただし、「資料活用の技能・表現」は従来、社会科では重視してきた評価観点である。「資料活用の技能・表現」を考える力や問題解決力、言語能力を高める方向と他教科、実社会への拡張という観点から拡張し、整理し直したものが「資料リテラシー」である。

5. 資料リテラシーを高めるためのメソッド

(1) 資料の論理的読解力を高める - 問いを構成する指導の充実

能動的・積極的な受信者を育てる

資料リテラシーは以上、述べたように、「資料を把握、解釈、分析して社会的事象の特徴や意義を理解する」「資料を活用し、資料に基づいて探究したことを論理的に表現する」ことである。前者がインプットとすれば後者はアウトプットとなる。問いの量と質を高め、資料から知見や知識を引き出し、資料を根拠にして効果的に説明することが重要なポイントとなる。ただし資料は、社会的事象の側面、一部を示しているに過ぎない。したがって資料から即座に全体や正答を導き出すことはできない。

とくに非連続型テキストの場合、直感的な印象でその内容を把握してしまうことが多い。写真や映像資料の場合、イメージが先行し、それが事実の全体であるかのような錯覚を与えてしまいかねない。非連続型テキストから発せられるメッセージを論理的、批判的に読み取るためには、メッセージの送り手の意図を積極的に読み解くことも必要になってくる。資料を単に利用するだけでなく、主体的、批判的に吟味することや資料の中に潜む価値観やイデオロギーを見抜いていくことも重要である。

連続型、非連続型テキストを資料として活用するためには、単に資料から多くの情報を取り出すだけでは足りない。事実認識、概念形成、課題探究の全プロセスにおいて、価値ある「問い」を広げ、深めていくことで読解の質を高めていくことができる。そのためには、過度の一般化や偏見を避け、知的な探究を促すような「問い方」に関する指導が要請される。社会科は社会認識を通して市民的資質の基礎を養うという教科の特性がある。社会事象に対し、地理的、歴史的、あるいは政治的、経済的な視点や枠組みからの問いかけとともに、「自分ならどうするのか」「何を選択するのか」「どう生きるのか」といった当事者としての自発的な問いかけも必要になってくる。

このように一つの資料(情報)から複数の視点から多様な問いかけをすること、さらに問いを深めていくことが読解や探究の糸口や筋道になる。「問いそのものに対する問い」「問う主体である、自己に対する問い」のようなメタ認知を豊かに繰り広げ、探究の世界に生徒を誘っていくことにより、資料リテラシーや論理的思考が高まり、市民的資質の基礎が養われるものと考えられる。

資料からの問い方を教える

生徒に資料を示して「できるだけ多くの疑問点を出しなさい」と指示してもとまどわせるばかりである。教師に言われたまま闇雲に「疑問点」を出したとしても、そのような指導だけでは問う力、考える力はなかなか高まらないし身に付かない。たとえば、ニュース報道では「5W1H」が事実を明らかにするための基礎的、本質的な問い方である。「事件はいつ、どこで起こったのか」「誰が関係しているのか」等々、「5W1H」を調べ、明らかにし、事実を浮き彫りにしていくのが取材活動である。このような事実をとらえるためのポイントやメソッドを理解させ、活用できるようにする指導が求められよう。

以下の表は筆者が考えた、問いの視点(例)である。「見えるモノ・コト」から「見えない関係」を洞察し、課題を発見・構成し、探究していくためには、このような「問い方」をもとにして観察したり、考えたこと整理したりする場が不可欠である。重要なことは多面的、多角的に資料を見て、分析的、総合的に問い続けることである。このような能力や態度を養うことにより、一つの資料からでも、複眼的に多様な情報を取り出すことができるようになる。もちろん、ここで示した以外にも多くの問い方がある。それぞれの資料に対してどのような問いかけをするのか妥当なのかということ教師が事前に考え、「発問」に結びつけていくことにより教材研究も深まるものと推察する。

事実認識のレベル

<観察できる社会的現象を記述（描写）する中で、疑問を持たせたり、発見を促したりする。>

位置に関する問い どこにあるか。どこに何があるか。どのように分布しているか。それはなぜか。

形態に関する問い どんな形をしているか。その形態に似ているものは何か。それはなぜか。

変化に関する問い どう変化したのか。変化にどんな発展性や法則性があるか。それはなぜか。

比較に関する問い 違いは何か。共通点は何か。何と似ているか。何と比較すればよいか。

分類に関する問い どう分類できるか。分類されたものはどのような差異性、共通性があるか。

概念形成のレベル

<観察できる社会的現象から概念に基づき、見えない構造や関係、機能を説明する。>

構造に関する問い どのような仕組みになっているか。部分と全体はどう関係しているか。

機能に関する問い どのような働きをするのか。どんなシステムがあるのか。

原因に関する問い 原因は何か。何が問題になっているのか。どんな問題があるのか。なぜ解決が困難なのか。

関係に関する問い 何と関係しているのか。どのような相関関係・因果関係があるか。

条件に関する問い どんな条件があるのか。どんな条件のもとで変化したのか。条件はどう変わったか。

課題探究のレベル

<資料を読解し、主体的な探究を通して論理的な主張を構成する。>

価値に関する問い どんな価値があるのか。どのような価値観や判断規準に基づいて考えるのか。

立場に関する問い どのような人々のどのような立場から考えるのか。他の立場から考えるとどうなるか。

視点に関する問い どのような視点で考えるのか。他にどのような視点があるのか。

自己に関する問い 自分はどうすべきなのか。自分はどう生きるのか。自分をどうしたいのか。

目的に関する問い どのような目的があるのか。その意図は正しいか。手段と目的が混同していないか。

図1 資料リテラシーを高める問い方の例

(2)資料ベースの論理的表現力を高める - 書く指導の充実

多様な「書く」を意識した指導

資料読解のプロセスは、大きく「資料の収集・観察 - 気付いたこと・分かったことを読み取る」「資料の分析・比較 - 疑問点を出す・予想し、仮説を立てる・他の資料と比較する。」「資料の編集・表現 - 資料を批判的に吟味する・わかったこと・考えたことを表現する」の3段階である。これらの段階において、書く活動を豊かに取り入れ、気付きや考えを記述させることが論理的思考力の育成に通じる。

読解したことを要約文や解説文、主張文等に表現する機会を設けることにより、読解がより精緻になる。このような表現は文章でなされるとは限らない。図解（模式図・概念図・関係図、スケッチ等、非連続テキスト）によって表現することもある。

言語活動の充実 - 国語科との連携を生かす -

新教育課程の中心的課題は、「生きる力」としての考える力（思考力・判断力・表現力等の育成）である。これらの能力は「言語活動の充実」を通して実現されるものである。すべての教科・領域において「考える力」を「言語活動」と結びつけることが要請される。社会科では、資料読解と言語活動を結びつけ、相互に高めるという指導と評価のあり方が問われる。しかし、資料を的確に読解する能力が子どもに育っていなければ、単に知識の詰め込みになってしまう。資料の特性に応じた読解能力を計画的、系統的に高める指導を工夫していかなければならない。

国語の学習指導要領では、「B.書くこと」における「記述」の項目で以下のような段階を設定している。「書くこと」の内容を見てみると、下線部にあるように論理的な文や文章を書くことが中心になっている。教科の固有性を生かして、これらの内容・段階性を意識し、書くことの指導を組み込むことにより、確かな論理的思考が豊かに育つものとする。

学校・学年段階	「書くこと」の内容と段階性（下線は筆者）
小学校： 第1学年及び第2学年	語と語や文と文との続き方に注意しながら、 <u>つながりのある文や文章を書くこと</u> 。
小学校： 第3学年及び第4学年	・書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。 ・文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。
小学校： 第5学年及び第6学年	・ <u>事実と感想、意見などを区別するとともに</u> 、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。 ・ <u>引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと</u> 。
中学校：第1学年	伝えたい事実や事柄について、 <u>自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと</u> 。
中学校： 第2学年	事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、 <u>説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと</u> 。
中学校：第3学年	論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、 <u>説得力のある文章を書くこと</u> 。

図1 「小学校・学習指導要領 国語」より 「書くこと」の内容

各段階に応じた「書く指導」を位置づける

A．事実認識過程における「記述」

事実認識過程においては、事実を見る眼を鍛えていく。そのためには「詳細に観察したことをもとに記述する」ことを中心に授業を展開する。連続型テキスト、非連続型テキストを問わず、資料を観察して考えられることや言えることは何か、分かることは何かということを書き記述する。最初は記述の質よりも量を重視する。小学校、第5学年及び第6学年の国語では「事実と感想、意見などを区別する」という目標がある。これは論理的思考の大前提である。ただし資料から読み取った（取り出した）事実を闇雲に記述させるのではなく、教師が読み取るための視点や例を示し、価値ある記述（情報の取り出し）を促す指導が欠かせない。また、社会科における記述には、スケッチや概念図、模式図等も含まれる。

B．概念形成過程における「説明」

説明するためには、説明する対象の理解が前提である。社会的事象を理解しているということは、事象間の相互関係や因果関係が分かっているということである。すなわち事実認識だけではなく、それが全体の中でどう位置づけられるのか、どういう意味や価値があるのかということも俯瞰できるということである。「事象間の関係を洞察し、説明する」ことを中心に授業を展開させながら、多様な資料に基づいてより説明力の高い概念へと到達させるようにするのがこの過程における授業の目標である。

基本的に、教科書は具体的な事実の記述（資料）と抽象的な説明文で構成されている。具体と抽象とを往還させながら、自分なりの表現方法で論理的な説明文を作成させていくような指導が重要である。

C．課題探究過程における「主張」

課題探究過程は問題解決学習でもある。自ら課題を設定し、仮説を立て、資料を収集・読解し、解決方法や提案を主張文（意見文）という形に構成させる。主張文の論理を展開する過程で、事実認識、概念形成が重要な意味を持つ。中学校、第3学年では「論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。」とある。論理的で説得力のある主張文を構成する過程と課題探究をセットで考えたい。完成した主張文は、他者との討議や社会への提言として活用することができる。主張文を相互に読み合い、吟味し合うことにより、より「説得力のある文章」へ再構成させていくことが、論理的思考力を高める上でも有効な指導方略である。

小中を連携した記述・説明・主張

下の図は資料リテラシー向上の観点から、記述、説明、主張を高める指導方略の一例である。このような表を下敷きにし、書く力の柱となる資料リテラシースタンダードを仮説的に策定する作を進めてい

きたいと考える。

	基盤形成期 (小学3・4年生)	基礎充実期 (5・6・中学1年生)	発展期 (中学2・3年生)
記述	<ul style="list-style-type: none"> ・社会見学等で、対象を詳しく観察させ、気付いたことや疑問に感じたことをカードに数多く書き出させ、一定の視点から分類させる。 ・取材ノートを作らせインタビューして分かったことを書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・野外調査において、詳細に観察したことや聞き取ったことを地図に記録し、記述させる。 ・一つの事実がどのように伝えられているかを複数の新聞記事で確かめ、その異同について話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞のニュースをもとに政治、経済、国際関係等のできごとに関するキーワードを抽出させる。 ・身近な地域における諸課題について、福祉や環境等の視点から発見したことを、記録させる。
説明	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から読み取ったことを既習事項や知識と関連づけて説明させる。 ・「つまり～」という表現で、見たこと、調べたことを解説(説明)文の形で書かせる。また、「例えば～」の表現で事例を挙げる練習をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係図や模式図、概念図等を通して、知識や概念の関連性についてまとめ構造化させる。 ・全体としてどのような広がりやつながりをもった問題であるのかを解説記事をモデルに文章で説明させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会事象の多様な関係(因果・対立・包含・階層等)を、知識と資料をつき合わせながら解釈させ、説明(記述・図解)させる。 ・学習内容と実生活、実社会とを往還的に説明することができる。
主張	<ul style="list-style-type: none"> ・「～によると」等、資料を引用し、根拠にしなが、考えを書かせる。 ・体験したことがら(事実)や集めた資料と自分の意見を分けて書かせる。 ・相手意識や目的意識を持たせ、主張したい点が明確な文章を書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対する予想や仮説を明らかにしてから複数の資料を収集し、それらを引用して報告書を書かせる。 ・図表やグラフなどを読み取り、それらを使い、新聞の社説をモデルにして、目的に沿った主張文を書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的課題に対して当事者としての自分の在り様、生き方をふまえたより説得力のある主張文を書かせる。 ・他者の立場を想像し、その立場からどのような主張が導き出せるかを予想し、その理由も書かせる。

図2 各発達段階における「書く」指導のあり方

記述・説明・主張の統合としてのレポート

論理的思考を高めるためには論理的な文章を書くトレーニングが欠かせない。そのためには生徒の発達段階を踏まえ、レポートの基本的な形式や構成を理解させ、取り組ませることが肝要である。たとえば「学習指導要領(平成20年9月) 社会編(p.39)」では、「調査の動機、調査の目的、調査の方法、調査の内容と結果の考察、感想や今後の課題、参考資料など」という項目を示している。レポートの目的は事実・根拠に基づく主張であるが、その根拠としての事実の記述や説明が不可欠の要素である。社会科においても夏休みの自由研究等でレポートを書かせることが多いが、「資料を詳細に観察したことをもとに記述する」、「事象間の関係を洞察し、説明する」、「論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書く」等の指導が十分になされていなかったのではないだろうか。

さらに個人で書いたレポートをもとにクラスで発表させたり、協同してレポートを作成させたりすることにより、他者の考えや評価を受け入れ、多面的・多角的な探究へと展開していくものとする。

(3)資料リテラシーのスタンダード(基準)を定める 非連続型テキストを中心に

資料リテラシーを高めていくためのメソッドとして、「問う」「書く」ことの重要性を述べてきた。「問う力」「書く力」は論理的思考力の中心であり、基盤である。問うことは確かなインプットを誘発し、書くことは確かなアウトプットを促進する。「資料に対して、問いながら書くこと」「資料を活用して、書きながら問うこと」の双方を重視した活動を授業や単元の中に組み込み、生徒の論理的思考を育成したい。

学校教育の目標は、実社会・実生活で活用できる知識や能力を育成することである。生徒が接する情報は、授業で与えられる資料のように系統的、計画的に提示されるものではない。むしろ、学校外の複雑で多様な情報に翻弄されやすい。とくに生徒の日常生活において、非連続型テキストに接する機会は

多く、これらのテキスト(資料)の読解方法を系統的、計画的に指導していくことは喫緊の課題である。しかも、ビジュアルコミュニケーションがさかんになり、非連続型テキストを有効に活用して考えを述べたり、情報を発信したりする機会がますます増えることも予想される。

ところが、非連続型テキストは種類も多く、たいていは情報量も多い。生徒はただ眺めるだけの場合も多いのではないだろうか。「問う」「書く」といっても、具体的にどのような学習活動を組織するのが妥当なのかということに関して明確な指針があるわけではない。どのようなことができれば(達成すれば)非連続型テキストを読解し、論理的な思考が身に付くのかということをはっきりと示していかなければならない。そのためにも、非連続型テキストに即したスタンダード(基準)を定める必要がある。

たとえば、地図や統計、映像や写真等、それぞれのメディアの特性に応じた読解スキルがある。それらの読解スキルは単に読解させておけば身に付くというものではなく、系統的、継続的に伸ばしていく指導が不可欠である。授業においても、知識を習得させるだけでなく、非連続型テキストの読解スキルを伸ばすという観点から生徒の学習活動を組織していきたい。

以下に示した「地図リテラシー」「統計リテラシー」「写真リテラシー」は、中学校社会科の授業において比較的良好に使う非連続型テキストである。各テキストに関するリテラシーを発達段階に即して、あるいは事実認識、概念形成、課題探究の各過程において高めていくようにカリキュラムを編成していく。

地図リテラシー

地図は幼少期の頃より大人に至るまで幅広く活用される資料である。近年、ICTやGPSの進歩により市民生活に不可欠な情報ソースとなっている。授業では多様な種類の地図を使いながら、読図力、作図力を高めていきたい。

	入門期カリキュラム (小学3・4年生)	基礎充実期カリキュラム (5・6・中学1年生)	発展期カリキュラム (中学2・3年生)
事実認識過程	<ul style="list-style-type: none"> 学校から家まで、また学校近辺の場所で観察したことを点や線に記号化し、地図にまとめることができる。 身近な場所の土地利用(住宅・商店・工場等)の様子について観察したことを文章で記述することができる(地図作文)。 	<ul style="list-style-type: none"> 新旧の地図を比較し、関連づけながら地域の変化の様子や予想される理由について記述することができる。 地図や空中写真、景観写真を読み取り、自然的、人文的特色記述することができる。略地図を描き、整理することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 縮尺の異なる地図を比較することを通して、読み取ることができる内容を整理し、地域の特性について記述することができる。 主題図と一般図を併用し、地域事象や地域課題、地域間の結びつき等について記述することができる。
概念形成過程	<ul style="list-style-type: none"> 場所の観察をもとに、農業や工業のさかんな地域の分布の特徴について記述し、その原因や理由について調べ、地図を用いて説明することができる。 身近な地域で何が問題になっているかについて、地図記号を使って表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 協同的に多様な地図を読解し、分布や土地利用の変化の原因や立地条件について説明することができる。 分布図等の主題図を作成し、分布や立地の理由や条件について複数の主題図を活用し、説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境問題等、自然的現象と人文的現象が相互に関連する地理的課題について、地図と文章を使って説明することができる。 南北問題等の国際的な経済的課題、民族問題等の政治的課題について、地図を通して空間的な因果関係を説明することができる。
課題探究過程	<ul style="list-style-type: none"> 地図から観察した事象とそれに対する自分の予想を分けて書くことができる。 主題図を作成し、それを使って自分の考えを述べるができる。 総合的学習で調べた内容について地図を利用して整理し、発表することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ルートマップを用いて野外観察や野外調査の計画を立てることができる。野外で収集した資料に基づき課題を探究することができる。 地理的課題に対する主張と根拠を明らかにしつつ、地図も活用して、主張文(意見文)を構成し、論述することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 資源エネルギー問題、人口問題に関して、地図化することによって空間的次元から課題を整理し、政策上の提案をすることができる。 現代社会における地理的課題について、論理的な主張を構成するために地図を利用することができる。

図3 地図リテラシーのスタンダード

統計リテラシー

情報社会にあっては統計に関する知識や技能、統計から論理的に考える力を身に付ける教育を教科横断的に取り組む必要が高まっている。統計的探究プロセスを生かしたカリキュラム開発が要請される。

	入門期カリキュラム (小学3・4年生)	基礎充実期カリキュラム (5・6・中学1年生)	発展期カリキュラム (中学2・3年生)
事実認識過程	<ul style="list-style-type: none"> ・事象を数量的にとらえ、統計で客観的、実証的に表すことの良さを理解できる。 ・統計グラフの数値をもとにして全体の傾向を読み取ることができる。 ・統計グラフを変化や大小等に対して予想を記述することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・統計グラフから分かったこと、気付いたことを既習事項や知識と関連づけて記述することができる。 ・統計グラフを比較し、疑問点や矛盾点を記述することができる。 ・統計グラフから社会的意味を見出すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・統計データから背後の概念を読み取ることができる。 ・統計データを関連づけ、因果や対立、包含等の関係を読み取り、記述することができる。 ・社会事象を説明するために統計グラフを選択することができる。
概念形成過程	<ul style="list-style-type: none"> ・統計グラフから読み取ったことをもとにして説明することができる。 ・観察、調査したことを統計グラフに加工して、読解し、説明することができる。 ・統計グラフの変化の傾向から将来の予測をすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・統計グラフに対して他者の読み取ったことを取り入れて、より深い気付きを導くことができる。 ・複数の統計データの傾向から、より高次の、また次元の異なる本質的な特性の読解へと発展させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・統計グラフを批判的に読み取ることができる。確かな統計データを選択して探究することができる。 ・統計データからその背後に潜む本質や仕組みを導き出し、モデル化(定式化)を通して、他の事象に適応して説明することができる。
課題探究過程	<ul style="list-style-type: none"> ・統計グラフから読み取れることを分析し、統計的探究プロセスを生かし課題を設定することができる。す ・考えたことをまとめる際に、統計グラフを引用することができる。 ・作成したアンケートを利用し、自分の主張を構成することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・統計データから課題を構成することができる。 ・複数の統計グラフを比較し、読み取ったことをもとに、筋道を立てて論述することができる。 ・インターネットのデータを収集し、課題を探究することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意思決定のために、説得力のある複数の統計データを使い、論理的に表現することができる。 ・提案力を高めるため複数の統計データを使い、他者と合意を形成しながら、共同して論理的な主張文を執筆することができる。

図4 統計リテラシーのスタンダード

写真リテラシー

写真から積極的、能動的に情報を取り出し、読み解く能力を高めていくことは、テレビ番組等の動画映像を批判的に読み解く態度を育成する上でも有効である。

	入門期カリキュラム (小学3・4年生)	基礎充実期カリキュラム (5・6・中学1年生)	発展期カリキュラム (中学2・3年生)
事実認識過程	<ul style="list-style-type: none"> ・景観写真からわかること、気づいたこと、感じたこと等を数多く書き出すことができる。 ・景観写真に写っているモノ・コトは何か、等について書くことができる。どこで撮影されたものかを地図で確認することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観写真をトレーシングペーパーで写し取り、写っているものの概要を説明することができる。 ・新旧の景観写真を比較し、地域の変化の様子を説明することができる。また、変化の理由について仮説を立てることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観写真に写っている場所における多様な関係(因果・対立・包含・階層等)を、解釈し、説明(記述・図解)することができる。 ・景観写真を人々のくらしや生産活動、政治、文化の視点から分析的、総合的に観察することができる。
概念形成過程	<ul style="list-style-type: none"> ・写真の景観と経験知との違いを指摘し、なぜそのような違いができるかを推理し書くことができる。 ・景観写真から学習課題を作ることができる。テーマを決めて、自ら景観写真を収集するとともに、様々な情報を取り出すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観写真から導き出された課題に対する予想や仮説を明らかにしてから、目的に沿った複数の資料を収集することができる。 ・複数の視点や立場に立って、資料を収集し相互に比較することを通して新たな課題を発見することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観写真に写っていないことがらを予想し、写真に付け加える形で描写することができる。 ・自ら課題があると思う場所(環境や安全等)の景観写真を撮影し、課題の重要性を的確に表現し、文章で伝えることができる。
課題探究過程	<ul style="list-style-type: none"> ・景観写真から読み取ったことと意見を分けて書くことができる。 ・景観写真を根拠にして解説文や主張文を述べるができる。 ・自分と他者の意見との違いや共通点を探し、良さを吟味し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で景観写真を撮影し、それらを活用して、社会的課題に対する見解を説明することができる。 ・国語で学んだ表現の技能を生かし、主張と根拠を明らかにしつつ、筋道を立てて、主張文(意見文)を構成し、論述することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・探究を深め、当事者として、実社会・実生活への主張や提案を景観写真とともに論理的に構成し、論述することができる。 ・他者と協力しながら、合理的な主張をつくり、修正しながらレポートにまとめることができる。

図5 写真リテラシーのスタンダード

6. 実践事例

**「地域の規模に応じた調査（都道府県規模の調査）」（中学校 1 年生）
大都市「大阪」の今と未来を考える（活用・探究型単元）**

(1) 題材設定の理由

視点と方法の習得と活用

この項目の目標は「47都道府県の中から幾つかの都道府県を取り上げ、地理的事象を見いだして追究し、地域的特色をとらえさせるとともに、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身につけさせる」ことである。「地理的事象」とは、社会的事象を位置や距離、立地や分布等の空間的な広がりとかかわりで構成したものといえる。「地域的特色」は、「地域の環境条件」「他地域との結び付き」「人々の営み」が相互に影響を及ぼしながら形成される。このように地理的事象に着目し、地域的特色を明らかにするための視点と方法を習得し、活用できる能力や態度を養うことが求められる。

この単元では、地域的特色を明らかにする方法を公民（市民）的資質に結びつけ、当事者として論理的に考え、判断する意欲や能力を高めていく。地域社会を静態的に把握するだけでなく、動態的にとらえ、自ら地域社会・コミュニティを形成していこうとする意思を養いたい。

大阪の今と未来を考える

A．大阪府を事例地域にした概念形成

この単元では都道府県に関する地理的、歴史的な知識を土台にしつつ、地域的特色を解明する視点と方法を学ぶことを主眼とする。大阪府は、生徒が居住する地域であり、地理的、歴史的な知識も豊富である。統計資料等を入手しやすく、新聞からの情報収集や聞き取り、景観観察等、非連続型テキストも多用できる。当事者として、望ましい地域のあり方を探究し、提案するためにも適切な単元といえる。

B．都市に着目した課題学習の構成 - 都市の発生と立地・都市問題・都市づくり -

大阪府は都市間のつながりが強く、京阪神大都市圏の中心である。今回の単元では、都市に着目し、その発生や立地、機能や構造、諸問題に焦点を当てた課題学習を展開する。静態的、動態的なアプローチから地域性を解明する方法を培いたい。

C．資料リテラシー向上の視点から

都道府県規模の地域的特色を追究する際には、地図リテラシーや統計リテラシー等を活用し、概念、考え方・調べ方を身につけさせ、他の都道府県に活用させる。資料の収集・観察 - 気づいたこと・分かったことを読み取る、資料の分析・比較 - 疑問点を出す、予想し、仮説を立てる、他の資料を使って調べる。資料の編集・表現 - 資料を批判的に吟味する、わかったこと・考えたことを表現する、というプロセスを学習過程に位置づけ、資料をベースにした課題学習を展開していきたいと考える。

(2) 単元の構成 教科融合型カリキュラムのあり方を求めて

統計グラフの活用に関しては数学（1学期に、統計グラフコンクールに向けた実践）、主張文の作成に関しては国語（1学期に、作文コンクール等に向けた実践）と関連づけて指導する。このように数学や国語で学習した内容・方法の活用場として社会科学習を位置づけていくことにより、資料リテラシーがいつそう向上し、生徒の考える力、探究する力が高まる。

さらに、小学校・中学校における国語教育との広範かつ系統的な連携も不可欠である。小学校と中学校、教科間の溝や壁を越え、トータルな視野でカリキュラムを構想していきたい。

(3) 単元の目標

単元の目標は以下の通りである。

観 点	観 点 の お も な 内 容
社会的事象への 関心・意欲・態度	都道府県規模の調査に関心を持ち、探究する意欲や態度を發揮することができる。また身近な社会事象を地理的・歴史的視点から探究し、提案しようとする態度を身につける。
社会的な事象に対する 思考・判断	地理的、歴史的な知識をもとに問題の所在や問題を成り立たせている構造を生活環境の具体的で切実な事例を通して発見し、主体的に探究し、意見を表明することができる。
資料活用の技能・表現	多くの資料から課題に即した資料を選択し適確に読み取るとともに、都市問題に関して論理的に自分の意見を構成し、話し合いをもとに考えを深めることができる。
社会的事象についての 知識・理解	大阪府の自然や歴史、人口、産業、都市問題等に関する基本的な知識・概念を身につけ、都道府県規模の調査に必要な見方、考え方、調べ方について理解することができる。

(4)単元の計画(全14時間)

学習過程は、「都市に着目した地域性の解明(7時間)」と「未来に向けての都市づくりを考える(7時間)」の二つに分かれる。

前者は「地図リテラシーを軸に資料の読解を通して概念を形成する過程」である。自然地図、歴史地図、人口地図、交通地図、産業地図をそれぞれ比較したり、重ね合わせて関連づけたりしながら、地理的・歴史的な視野から地域的特色を解明する方法を学ぶ。

後者は「統計リテラシーを軸に、形成された概念に基づいて資料を読解する過程」である。前者の理解や認識をベースにして、都市化する社会や都市問題に着目した課題学習を展開する。

(5)授業の実際

事前の学習 - 夏休みの課題・総合的学習との関連を生かす -

A. 夏休みの課題

夏休みの課題として、「身近な地域の歴史を調べる」、「新聞記事に掲載された日本・世界の地域」に取り組ませた。前者は、「身近な地域の歴史について、自分でテーマを決めて調べ、レポート(5~10枚)にまとめる」というものである。レポートの構成としては、テーマ設定の理由、調べてわかったこと、自分の考え・推理、結論、参考にした資料・取材先・引用した本、である。後者は「新聞記事から日本・世界の地域に関する記事を探し、記事を解説する」というものである。地域の特色、文化、名所、すばらしい点、行ってみたいと思わせる記事を選ばせ、「記事の内容を的確に要約する」「地図帳を活用し、略地図を描いて効果的に整理する」「調べたことをまとめる」「感想、意見、疑問を書く」ことに留意させて取り組ませた。作品は文化祭に展示し、一般の参会者も閲覧できるようにした。

B. 総合的学習・STEPでの取り組み

1年生の総合的学習(STEP情報)では以下のような取り組みを行い、情報活用の実践力を培っている。

「メモの取り方」「インタビューとまとめ方」「レイアウト」「課題設定の方法」「写真撮影」「新聞・書籍活用法」「インターネット情報の利用」「著作権について」「プレゼンテーションの方法」等。



総合的学習(STEP)での取材活動の様子

①概念形成過程—都市に着目した地域性の解明—地域事象の認識—（7時間）

時間	主題	おもな学習活動	観点	評価規準	評価方法	評価規準に対する判断基準 A/Cがつく生徒への対応
	夏休みの課題	「歴史：身近な地域の歴史を調べる」「地理：新聞に載った日本・世界の諸地域」「道徳：わが町のやさしさ発見レポート」に取り組む。	関	自らテーマを設定し、身近な地域の歴史を調べ、レポートにまとめることができる。新聞記事の読解を通して地域事象をワークシートにまとめることができる。	レポート ワークシート	A 自ら主体的に多様な資料を収集し、適切にまとめることができる。 C 参考文献や博物館等を紹介し、情報の入手先についてアドバイスする。
1	大阪府の自然的特色—地形から地形を読む—	地図や統計を見て、大阪の地形的環境や気候的環境を大観する。3Dの立体地図（近畿地方）を観察し、近畿地方における大阪府の地形的特色を把握する。	資	地図から、「方位」「距離」「高さ」に着目して、地形的特色を記述することができる。降水量や気温の特色を全国平均と比較して記述することができる。	ワークシート テスト	A 地形的・気候的特色について、基本用語を活用し記述することができる。 C 教師が記述した文章を読ませ、基本用語の活用方法について理解させる。
2	大阪の歴史—地域史をたどる・都市の起源と発展—	古代、中世、近世、近代の大阪の移り変わりを教科書や諸資料をもとに大観する。特に近世や近・現代における大阪の発展のあらましを把握する。	知	大阪の歴史年表や資料集、古地図、NHKビデオ番組を通して、大阪が歴史的にどのような経緯で発展してきたかについて説明することができる。	ワークシート テスト	A 都市が形成されてきた背景を歴史的な観点から説明することができる。 C 歴史の教科書・資料集から大阪や関西に関する記述を探させる。
1	人口統計から見た大阪府	人口密度や人口増加率の統計を見て階級区分図を作成する。また大阪府の人口に関する基本的な統計をもとに都市の規模や配置について理解する。	資	大阪府の人口に関する統計を複数、比較しながら読解し、傾向や地域差を読み取り、列挙する。他都市と比較し、その理由や背景について記述することができる。	ワークシート テスト	A 統計地図から疑問点を抽出し、仮説を立てることができる。 C 統計から読み取れることを列挙させ、相互の関連について考えさせる。
2	交通から見た都市間のつながり	地勢図や新旧の地図を見て、大阪における交通の発展の様子と他地域とのつながりを把握する。交通網と都市の立地、都市間の関係を整理する。	資料	道路、鉄道、航空の交通の発展が都市の発展にどのように関わっているかを地図にまとめることができる。人口の移動と交通との関係を読み取ることができる。	ワークシート テスト	A 地図から人口の分布と交通網との関係を描くことができる。 C 鉄道と道路の地図と都市部の位置関係を整理させる。
1	産業統計から見た大阪府	大阪府の統計（産業に関するもの）を読み、全国的な視野のもと他地域と比較しながら、産業から見た大阪の地域的特色を読み取る。（統計の分析と総合）	資・思	統計をもとに、「読み取れること」とともに、「背景や理由」を記述することができる。さらに「背景や理由」について関係図に示すことができる。	ワークシート テスト	A 統計を比較し、産業における大阪の地域的特色を説明することができる。 C 他の都道府県と比較することを通して大阪の地域的特色をつかませる。

②課題探究過程—未来に向けての都市づくりを考える—地域課題の探究と意志決定—（7時間）

1	都市化する社会—関西大都市圏（都市を見る視点）	大阪府における政令指定都市の立地や中心地の土地利用をもとに都市の形態や機能、都市間の移動、都市圏の広がり、背景等について理解する。 身近な都市景観、再開発地域、都市モデル等を題材にし、都市に対する関心を深め、他地域への興味を持つ。都市問題に関する基本的用語を理解する。	知 資	地図帳や地勢図を活用し、大阪や日本、世界の都市の立地や分布の理由について、自然環境や歴史的背景、交通や産業との関連を描くことができる。 新しい鉄道網の整備や何層野再開発を例に、都市再生、都市づくりに向けて関心を持つことができる。都市の発展と生活の向上との関係を考えることができる。	ワークシート ワークシート	A 都市の立地や関係的位置の背景・理由について説明することができる。 C 統計地図を読解させ、大都市を中心とする立地の理由を考えさせる。 A 都市の再開発が必要になってきた理由について説明することができる。 C 快適な都市生活にとって何が必要になってくるかについて考えさせる。
3	都市問題を考える（都市を考える方法）	都市化問題や都市と地方の格差、環境問題、都市防災、交通問題、インナーシティ問題等、都市をめぐる諸問題に多様な資料をもとに気づく。 統計資料等を活用して、都市をめぐる諸問題について学ぶ。市民として都市づくりのあり方、魅力ある都市の姿等についても構想をめぐらす。	知・関 資・関	都市化が世界的な傾向であることを認識するとともに、その理由について考えることができる。身近な地域、経験から都市化の光と影を説明することができる。 大阪を例に、統計データや地図を活用して、都市問題とその対策、都市政策について、資料を収集することができる。身近で具体的な問題を提示することができる。	ワークシート ワークシート	A 都市化に関する問題点を、グローバルな視野から説明することができる。 C 具体的な都市問題の例を一つ挙げ、発生する理由を考えさせる。 A 実際にどのような問題が発生しているかについて説明することができる。 C 教師が収集した資料を提示し、具体的な問題点に気づかせる。
3	これからの都市づくり—私の提案—（都市を「つくる」行動へ）	「未来に続く、魅力あふれる都市づくり」のあり方に向けて、個人でテーマを設定し、1000字の主張文を作成する。 主張文を相互に読解し、評価しあう。主張内容そのものと内容と根拠となる資料と関係を読解し、同意・反論する点を検討する。	思考 思考	インターネット等で資料を収集し、地図や統計データを活用し、社説等を参考にしながら、論理的な文章を構成することができる。 相互に主張文を読解し、改善点について話し合うことができる。対話を通して、課題意識を主張文を再構成することができる。	原稿用紙 原稿用紙	A 社説をモデルにして、論理的な文章を構成し、記述することができる。 C 論理的な文章の型を教える。型に従って記述するように指導する。 A 他者の主張文を参考にし、効果的な文章に修正していくことができる。 C キーワードや重要な箇所に着目させて文章を読ませるように指導する。

図6 単元の計画

9月には午前中の半日を使って、第一次フィールドワーク（予備調査）を行った。「平野の自然」「平

野の歴史」「平野の商店」「平野の公共施設」「平野の寺社」等のテーマに基づき、班（4名）ごとにサブテーマを設定し、調査活動（観察・インタビュー・取材等）を行う。調査後、調査内容を四つ切り画用紙にまとめ、学級で発表会を実施した（3分）。11月に第二次フィールドワーク（本調査）を実施し、調査内容を整理し、12月に「総合的学習発表会」で発表する。

概念形成過程 都市に着目した地域性の解明 地域事象の認識

A．大阪府の自然的特色

地図や統計を見て、大阪の地形的環境や気候的環境を大観する授業である。国土交通省、国土地理院・近畿地方測量部」から3Dの立体地図をお借りして生徒に提示した。近畿地方の立体地図を観察し、近畿地方における大阪府の地形的特色を把握させたあと、地図帳を観察させ、方位、距離等に注目し、地形的特色を記述させる。



3D地図の観察の様子（近畿地方）

地形の特色を文章で説明する際には、山地、山脈、台地、丘陵、平野、盆地、河川、に着目し、東・西・南・北、北東・北西・南東・南西、の方位を表す用語、距離や高さを表す用語を使わせる。気候に関しては、降水量や気温の特色を全国平均と比較して大阪府の自然的特色記述させる。

B．大阪の地域史をたどる 史料や歴史地図、年表を読解する

大阪の古地図（河内湾から河内湖まで・古代都城の位置関係・臣時代の城下町大坂・近世大坂の町割り等）を配布する。古代、中世、近世、近代の大阪の移り変わりを教科書や年表、諸資料をもとに大観させ、100字程度で説明させる。特に近代から現代の大阪の歴史に関しては、NHK放送番組（「映像の20世紀 なにわ大阪100年史」）を通して概要を理解させる。

C．人口統計から見た大阪府 統計資料を読解する

人口について調べることは地域性を解明する上で極めて重要である。人口について調べるためには、人口密度、人口分布、人口構成、人口増減、人口の動きの5つの要素に視点を当て、これらの要素に関する統計を読解させることが必要である。



階級区分図の作成

「人口密度」については人口密度図、「人口分布」については、都市の位置と人口（地図帳）、人口分布図、「人口構成」については人口ピラミッド、「人口増減」については、人口増加率、「人口の動き」については、昼夜人口比率について調べさせる。作業としては以下の2つである。

作業：「大阪府の人口に関する統計（2005年）総務省統計局・大阪府」の統計データを使い、「統計地図（階級区分図）」を作り、分析する。作成する統計地図（階級区分図）は、「人口密度」と「人口増加率」である。

作業：から の視点の一つを選び、統計を選択して「人口から見た大阪府の特色」について記述させる。

統計グラフや統計地図を読解し、記述させることになる。この方法として、以下の手順を示した。

第1段階 グラフの外側を読む（グラフの目的と枠組みの確認） -

第2段階 内部を読む（全体読みから部分読みへ）

第3段階 理由を考える（疑問から予想へ）

D．交通から見た都市間のつながり

－地図資料を重ねて読解する－

地勢図や新旧の地図を見て、大阪における交通の発達の様子と他地域とのつながりを把握する。トレーシングペーパーを使って、高速道路網、鉄道網、人口10万人以上の都市を地図帳から写し取らせる。この図を大阪府の山地や台地、河川図と重ね合わせる。交通網、都市の位置、地形に関する地図を重ねて相互の関係を読み取らせるという作業である。

このように主題図（道路図・鉄道図等）を作成したり、複数の主題図を重ねたりすることを通して、地図を分析的、総合的に読解する能力が養われる。

E．産業統計から見た大阪府 複数の統計地図を比較して読解する

「大阪府の工業分布の変化（全国工場通覧 1996/97版、ほか）」の統計を読解し、「読み取れること」から「背景や理由」を記述させた。1970年と1998年の都市の工業分布を比較させ、大阪の工業の特色と変化について理解させ、理由や背景について考えさせるという内容である。ここでは「人口統計」の学習で培った統計資料の読解方法を活用させる。

「グラフを読み取る手順」の「第1段階 グラフの外側を読む」は、教師の方で読み取り方を教え、第2段階、第3段階の読解に取り組ませた。

未来に向けての都市づくりを考える 地域課題の探究と意思決定

A．関係図（リレーションマップ）をつくる

課題は、「環境」「福祉」「国際」「安全」の四つの視点から一つを選び、このカテゴリーから課題（サブテーマ）を設定する。

「因果関係・影響・変化・移動」「相互依存関係」「対立関係」「結合関係」「階層関係」「交わりの関係」「包含関係」等、キーワード間の関係を図で示させる。

このような関係図を描くことによって、何が問題になっており、どのような問題のつながりがあるのかが見えてくる。何と何がどのような関係にあるのかということを考えてから、問題のありかを明らかにしていくことから課題を絞り込ませる。

B．インターネットで資料を検索する

関係図の作成と並行して、PC教室でインターネットを利用した資料検索に取り組ませる。事前に、大阪府や総務省のホームページを紹介し、統計データを中心に検索に取り組ませた。検索語は、環境・福祉・国際・安全や関係図に自分で書いたキーワードから選ばせた。



統計の読解と記述



関係図を描いて課題を設定する

インターネットを使った調べ学習は、総合的学習・STEPでも取り組んでいる。調べたことは、「資料収集カード」に記入したり、プリントしたりして主張文の構成に活用させる。

C．資料の読解作業（統計リテラシー）

収集した資料を読解し、主張文の作成に生かせるように指導する。

資料の収集にあてる時間は2時間程度と十分な時間を当てることができない。生徒には以下の資料を全員に持たせ、それらも活用するように促した。

- ・大阪府 地域の歴史を調べよう（浜島書店）
- ・大阪府のすがた（とうほう）
- ・国勢調査 大阪府の人口及び世帯数 大阪府
- ・データ大阪
- ・大阪府を調べよう（帝国書院）
- ・ビジュアル地理（とうほう）

D．地図の読解（地図リテラシー）

主張文の評価規準は、「提案性」「論理性」「地域性」であり、大阪の地域的特色を生かした都市づくりを論理的に提案させることを目標とする。収集した資料を「大都市・大阪」に結びつけて探究させることが大切である。地域や場所に基づいて主張を展開させるために、社会科教室に、大阪の地図（地勢図・地形図）を常に閲覧できるようにしておいた。

E．新聞を活用して（新聞リテラシー）

主張文を作成させるにあたり、新聞の「社説」や「読者の欄」を参考にさせた。社説に興味を持たせ、文章を構成するために、朝日、毎日、読売の各新聞社の社説を読ませ「主張とその根拠を探し、それぞれ線を引かせる」「自分の考えに近い社説を一つ選ぶ。その記事のキーワードを選び、関係図をつくる」など社説の論理構成をモデルにするように促す。

F．「構成メモ」を作成する

主張文は、「関係図」（探究活動）「構成メモ」（探究活動）「記述」「推敲」の順に指導し、作成させる。構成メモは、問題提起（主題に対する問題提起を行う）、意見提示（問題提起に対する、自分の意見を簡潔に示す）、展開（意見提示に対する根拠を書く。この部分が主張文の中心となる）、結論（全体を整理し、主張を再度述べる）の順になっており、主張文を構成する際の基本的な流れを書かせ、主張の構想を練らせる。



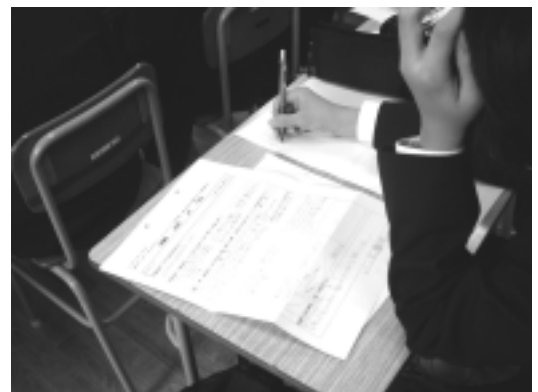
インターネット検索で資料を探す



大阪の地図（地勢図）を眺めて



統計資料を読解しながら構成メモを書く



構成メモを見ながら主張文を書く

G．1000字主張文を作成する これからの都市づくり：私たちのプロジェクト提案

主張文の作成にあたっては、中学校3年生の国語教科書（教育出版「根拠をあげて述べる」）を読ませたり、「論理的文章の書き方指導 中学校編（市毛勝雄編著、明治図書）」を参考にさせたりした。主張文の評価規準は「A．提案性：創造性や説得力のある内容になっている。」「B．論理性：事実（資料）の裏づけがあり、筋道がしっかりしている。」「C．地域性：大阪の地域的特色を生かした内容になっている。」の三点である。構成メモに沿って文章を書かせるが、留意する点として以下の項目を掲げた。

ア．句点をなるべく多く、一文を40字程度にする。

イ．パラグラフ・ライティングを心がけさせる（一つの段落＜パラグラフ＞に一つの意味のまとまりをもたせる。）

ウ．接続詞を使って筋道立った文章を作らせる（そのために接続詞のレパートリーを示した。）

エ．文末表現に意識させる。（そのために文末表現のレパートリーを示した。）

H．主張文の中間評価

主張文やそれを支える資料を協同的に読解・評価しながら、大阪の地域的特色を踏まえた、提案力のある文章に再構成（推敲）させる。相手（市民）に正しく通じ、説得力のある主張文になっているかを確認し、より効果的な主張文に作り替えていく作業である。流れとしては、主張文をグループ（4～5名）で熟読し、話し合いを通して文章の内容を相互評価するというものである。他者の主張文を評価することによって、自分の主張文の良い点、改善点を探らせていく。

I．新聞社の「読者の欄」に投稿する

全員の主張文を冊子にして、1年生全員（119名）に配布した。他者の文章を読ませ、さらに多様な視点に学ばせようと考えた。

その上で、各自が書いた1000字の主張文を新聞社に投稿するために、400字に再構成させる。自分が特に主張したい点に焦点化し、具体的な資料や事例をもとに文章を練り直させた。生徒の書いた主張文を生徒の同意を得て新聞社の読者の欄に投稿した。

(6)授業実践における成果と課題

成果としては以下の通りである。

- ・「用語的な知識を網羅的に暗記する学習」から「獲得した概念を活用し、読解した資料に基づいて説明する学習」に展開できたと考える。生徒は環境や安全、福祉等、生徒は多様な問題意識を持っており、教科学習から総合的な学習への発展・深化を図れるような学習活動になっていったと考える。
- ・主張文の構成について、社説を参考にさせたことにより、イメージ化が図られやすかった。生徒の問題意識や探究の深まりは、主張文の内容にエビデンスとして示される。主張文の構成の中に学習のプロセス（課題設定・課題追究・資料リテラシー等）が組み込まれている。主張文を論理的に構成させていくという作業を軸に探究を深めさせていくことは有効である。
- ・大阪の都市問題を軸に学習を展開したことにより、生徒にとっても関心が高まり、実社会・実生活

環境の視点

- ・環境都市はリサイクル社会によって実現される
- ・大和川に清流を - 大和川観光地化計画 -
- ・大阪の森林伐採と大型開発

福祉の視点

- ・女性労働者の負担を減らす、大阪全体の意識改革
- ・町中で見かけるバリアフリー
- 僕が思うバリアフリーの問題点 -
- ・体の不自由な人やお年寄りの人が住みやすい町に

国際の視点

- ・外国人労働者を取り巻く実態とは？
- ・音楽から伝わる国際文化
- ・関西国際空港から伝えよう - 大阪の文化を -

安全の視点

- ・子供に対する犯罪の防犯対策を強化する！
- ・安全都市大阪！みんなを信用できる未来へ……
- ・今のカーブミラーの設置基準は問題ではないか？

図7 主張文のテーマ（一部）

につながる身近な体験や記憶を生かした学習活動を進めることができた。

課題としては以下の通りである。

- ・作文力、文章力の個人差が極めて大きい。社会科においても、生徒に論理的な文章を書かせるための具体的な手順を示し、繰り返し指導を行う必要がある。特に、主張の本質を要約し、焦点化して、文章を構成するための練習・習熟が不可欠である。
- ・既習内容や自分の経験を生かし、実生活・実社会の中から課題を設定したり、自分の経験と結びつけながら主張を論じる力がまだまだ弱い。一般論に終始し、意味も十分にわからないまま専門用語を使うケースも散見された。
- ・一つ一つの資料読解の深まりが足りなかった点が課題である。また、異なる資料の比較検討についても不十分であった。インターネットで収集した資料を批判的に吟味したり、複数の異なる見解を比較したりする機会は乏しかった。

7. おわりに

実社会・実生活と豊かに交わりながら、確かな論理で提案・主張を構想することは、生徒の探究意欲を高めるとともに地域社会に眼を向けさせる契機となる。このことが市民的資質の基礎となることはいうまでもない。

ただし、今回の学習は単に主張文を作成することを目的とするものではない。主張文を構想したり、資料を読解したりするプロセスにおいて、論理的思考力、活用する力、身近な問題を環境や福祉等の視点から捉え直し、課題意識を深める力、確かな資料リテラシーを高めていこうとするものである。また、課題探究過程において、知識、概念、資料の重要性に気づき、さらに自ら学び、考えることの意義について実感させ、習得・活用・探究のそれぞれの重要性を再認識させたいと考えた。どこまで生徒に実現しているかは、今後の学習状況や思考の深まりを継続的に評価し、明らかにしていく必要がある。

現在、社会全体には「わかりやすさ」を求める風潮が広まり、強まっているのではないだろうか。「わかりやすさ」はそれ自体、望ましいことには違いないが、「わかりやすさ」の背後にある「意図」や「そぎ落とされた部分」を見抜く目を持つことも肝要である。現実の世界は複雑で多様である。未整理でわかりにくい情報であっても、嫌悪感を持つのではなく、自発的、能動的に情報を受容し、悪戦苦闘しながらも、ねばり強く問い、考え続ける態度がますます重視されなければならない。小さな、取るに足りない情報であっても、そこに重大な問題や危機が隠れていることもある。論理的思考力は問題・危機発見や解決するための「戦略・戦術」なのである。

今後、自ら学び考える力を言語力を軸にした論理的思考に焦点化し、実社会・実生活に深く結びついた活用性、汎用性のある社会科カリキュラムを構築していきたい。時代、世界、人間を広く、深く認識し、持続可能な未来社会を他者と協同しながら構想し、創りあげていく意思と能力をもった人間を育てていきたいと考える。このことが情報教育の深化につながり、生徒の情報活用能力を育成することに、豊かに結びついていくものとする。

実施場所 大阪教育大学附属平野中学校